



町並み資料館紹介

宿場まつり期間中、無料で自由に見学できます。



松尾家

木屋瀬には村庄屋、宿庄屋、船庄屋の三庄屋が置かれ、村庄屋は村全体を統括した。松尾家は屋号を灰屋と称し、問屋役・人馬支配役、村庄屋などを務めた。当家には江戸時代後期から明治初期にかけての木屋瀬宿駅、郡方、村方に関する貴重な資料が多数伝えられている。

この建物は江戸時代末期の建築で、木屋瀬を代表する町家の一つである。妻入りの入母屋造り、漆喰を軒裏まで塗り込めた大壁造りで、かつて二階に鉄格子付の窓を設け、外側に防火戸を建てた。居室部には摺り上げ戸が残る。

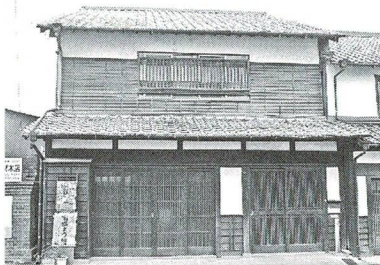


梅本家

江戸時代、木屋瀬には年貢米の集積場である本場（米場）が置かれ、その輸送は権利を持った24艘の川ひらた（川舟）に限られていた。この24艘の管理が船庄屋の仕事である。

梅本家は屋号を油屋今と称し、江戸時代は酒造業、明治に入り醤油醸造業を営んでいた。

この建物は江戸時代末期の建築で、木屋瀬を代表する町家の一つである。平入りの切妻造り、外壁は大壁造りで、かつて屋根は草葺であった。角座敷は明治5年（1872）の建築である。



高野家

高野家が現在の木屋瀬本町に居を構えたのは明治の末頃、長津村（現・中間市）村長高野曠喜の次男「重義」と木屋瀬・下町質屋（屋号子）井上清太郎の長女「多仁」が移り住んでからである。この地区はその昔“八軒

屋”と呼ばれ、木屋瀬宿・本陣の向かい側に八軒の萱葺き屋根の家が軒を連れ旅籠を営んでいたという。

現在この建物は、明治40年5月14日の大火後に建て直されたもので、築後約110年位になる。建物は間口約6.5m（3間半）、奥行約25m。南側に通り庭があり、間取りは表から店の間、中の間、座敷、坪庭、裏の間、そして炊事場・井戸などの水回りが配置されており京都の町屋と同様なつくりとなっている。



井上家

井上家は代々この地に居住し、昭和初期まで質屋を営み、マルチの屋号を有したという。主屋の背面に広い庭園を配し、当初はこれを囲んで渡り廊下に続く風呂・便所、通り土間から延びる釜屋を設けていた。

二階の柱のほとんどが中央で継がれており、当初は軒高の低い中二階であったと思われる。

当家は嘉永5年（1852）『木屋瀬宿之図』にも、妻入りの切妻造り瓦葺きとして描かれる。柱が木太いこと、当初は中二階であったことから、建築年代は江戸後期に遡ると推定される。通り土間は三和土で、保存状態も良く、江戸期の町家を代表する遺構として貴重な存在である。